

ブレーメン経済工科大学

交換留学報告書

静岡県立大学 国際関係学部

国際言語文化学科 4年 ヨーロッパコース

本学の提携校ブレーメン経済工科大学（以後 HSB）に約 1 年間籍を置き、慣れない異国の地で送った生活を振り返ると、何もかもが刺激に満ちており、常に新鮮さを感じていられる、おそらく人生においても唯一無二のものとなったと言えるだろう。移民・難民が多く暮らす多民族国家とも呼べる場所に、観光客としてではなく文字通り一市民となって初めて見える景色というものは、以前の私には想像も及ばないものであった。光と闇、その国の両方の面を知るのに 1 年という期間は決して十分ではなかったが、それでも知れることは多くあった。文化、人間性、思想全てにおいて異なる国において生活することは、その人が勤勉であれ怠惰であれ確実に有意義なものになる、ということだけは断言できる。

例えば私のように、机に向かって勉強することがあまり得意でなく、つい友

人らと外出することを優先してしまう人間でも、その遊びから得られる言語における経験はかなり大きなものであったと、結果論ながらも思う。文法の正確さや文章の読み書き能力の向上には机と向かい合うことは避けられないが、語彙の補強や経験、度胸は座学では決して得られないものである。またそういった座学により得られるものは、一人の時や、言ってしまうえば日本においても同様に得ることはできる。ただし話すことの経験や度胸や慣れ、といったものは社交的な場面でこそ得られるものである。私は実際、2学期目において講義は他の学生よりも少なかったが、その代わりとしてタンデムを数多く行うことでドイツ語のみを話す機会を増やした。

正直なところ、夏休みまでの数ヶ月間は、ドイツ語の知識があまりに不足していたことや、それを恥ずかしいと考えてしまう姿勢もあり、ほとんど英語のみで過ごしてしまった。英語の経験を積むことも結局は重要なことではあるし、決して悪いことではないと思うが、せつかくドイツという、英語圏ではない国に過ごしている以上、その国の言葉を話せるようにならない、というのは非常にもったいないことであるとも思う。ただ、夏休みの半ばから住まいをホームステイから、9人が住むWGに移したことはかなり大きな功を奏したと

言える。その頃から実感を伴う程に言語における上達が見られた。ドイツ人やオーストリア人、ドイツで働くイタリア人やブラジル人、ドイツ語を何不自由なく使いこなす人々と生活を共にすることは、言い換えれば朝起きてから寝るまでその言語に身を浸すことと同義であるのだと身をもって体感した。帰国する頃には、決して満足はできないものの、友人と歓談するにも、保険会社や銀行と契約の話をするにも問題なくことを成せた、というのは成果としては十分なものと言えるだろう。反省点としてあげられるのは、2学期目は頑なにドイツ語のみを使うことにこだわりすぎていたために英語の上達があまりみられなかったことである。

留学生活の間に受けた大きな影響として挙げられるのは、考え方におけるものも多くある。

まずは日本という国家における当たり前のものには、他国においては決してお目にかかれぬものもあるということ。時刻表に忠実な公共交通機関や、公共の場の清潔さは、この国においては欠けば批判されうるものである。しかしそれは決して存在して当然のものなどではなく、小さな島国ながらも大きな存在

感を誇る極東の誇るべき文化とも言える代物なのだ。

また全く別の例として、外国人排斥などのレイシズム的な思想は大いに弾劾されてしかるべきものではあるが、嫌悪する側にも時には経験から来る、否定することが憚られる理由があることを知った。以前の私は、差別はその対象に対する無理解と不寛容の産物であると考えていた。しかし、差別は豊富な経験や対象への理解からも十分に生まれうるものであると、今では考えるようになった。現在も民族差別は根絶されることが望ましいものである、という考えは持っているが、ある人物が、自らの経験によって生まれた差別を掲げていた場合、その経験を持っていない我々には彼、もしくは彼女を批判する権利はないし、決して消されて良いものではないとも考えるようになった。

このように、この1年を通して得たものは数多くあり、少なくともそれらは今後の人生においても大きな意味を持つものになるだろう。良くも悪くも楽天的な性格のため、一般の留学生が感じる言葉の壁や困難、というものはあまり感じないまま留学生活を終えてしまったことは気がかりであるが、総じて楽しく充実して過ごせたと言える。